

1. 定義・目標と基本的な考え方

<本プロジェクトの定義>

- ・「記紀・万葉プロジェクト」は、記紀・万葉集に代表される奈良県特有の歴史素材を活用した行政施策を効果的に展開していくものであり、新しい時代に奈良県の存在価値を内外に示すとともに、「本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良」を名実ともに実現していくための取り組みです。
- ・本プロジェクトが目指す「本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良」の実現とは、長い年月をかけて守り伝えられてきた県内各地の様々な歴史的遺産を、奈良県に住まい、あるいは奈良県を訪れる人びとにとって、その真価を十分に理解でき、感動を味わえるものとする事です。知らずに見ればただの草原や田畑にすぎない風景でも、その場所にまつわる歴史や伝承を知った人が見れば、そこに全く違う古代の風景が立ち現れてくるはずであり、その体験を通じて歴史に対する興味を深め、感動を味わうことが、本プロジェクトで言うところの「本物の古代と出会い、本物を楽しむ」ということなのです。

<目標>

本プロジェクトでは、国際的視点も加味した「古事記」「日本書紀」「万葉集」についての価値意識を醸成するとともに、「記紀・万葉」を実感する地・奈良の受け皿を整備して「記紀・万葉で楽しむ県」「記紀・万葉と暮らせる県」という奈良県の「新しいブランドイメージ」を創出することを念頭におき

- ① 奈良県が歴史情報の発信のしかたとその味わい方の提案に関するリーダー的存在となる
- ② 歴史素材の多角的な紹介により、奈良県の魅力の再発見、地域の誇りの醸成につなげる
- ③ 奈良県への誘客を促進し、顧客満足度を高める

ことを目標に掲げるものといたします。

2. 構想推進にあたっての留意点

①「歴史」と施策・事業などの取り組みをつなぐ

歴史情報を収集・調査分析し、発信のためのテーマ付与手法を開発して関係機関に情報提供し、「奈良県の歴史」と施策・事業などの取り組みとをつなぎます。

②「ニュートラルな立ち位置」を確保する

記紀・万葉集は様々な学術分野の研究対象となっており、その解釈には様々な議論があります。また、かつて皇国史観による国威発揚に用いられた経緯もあり、特に記紀についてはこれまで広く一般の人びとに親しまれるものであったとは言えません。従って、行政として記紀・万葉集を扱う際には、特定の考え方や学説に偏ることなく、それぞれの論拠や出所、発信者等を明らかにして、ニュートラル(中立的)な立ち位置から、諸説の並列的・列記的発信を行うよう努めます。

③「多様な視点」からの情報発信を行う

④ 学術研究機関との「人的ネットワーク」を構築する



3. 事業計画

<計画期間>

平成24(2012)年は『古事記』が完成して1300年、平成32(2020)年は『日本書紀』が完成して1300年にあたり、これら2つの節目の年をつないで、9年に及ぶ長期のスパンでプロジェクトを展開します。

<平成23年度事業について>

平成23(2011)年度は、県内外に対するシンポジウム・フォーラムの開催等の情報発信事業を中心として、有識者・研究者からの聞き取り調査等幅広い関連情報の収集と整理を進め、県が主体となって推進する「記紀・万葉」関連事業の方向性と考え方を確立。併せて、奥深い情報の蓄積による本県の歴史的な強みを存分に引き出すための下地を醸成します。

<平成24年度以降について>

《平成24年度》

古事記完成1300年の記念年である平成24(2012)年度には、平成22、23年度において蓄積した情報と確立した方向性をもって、各種主体が幅広い「記紀・万葉」素材を活用し、本格的な事業展開を図るべく、今後も引き続き事業メニューについての検討を行います。

《平成25年度以降》

平成25(2013)年以降は、平成32(2020)年を視野に入れた長期的な事業展開を意識しながら、前年度までに収集した情報を次年度の発信事業に活かすという考え方にに基づき、年度ごとに実施すべき事業を検討します。

4. 今後の検討課題

- ① 市町村、地域団体との連携についての検討
- ② 記紀・万葉集にゆかりのある他府県との連携の検討
- ③ 部局横断型組織による庁内ネットワークの強化
- ④ プロジェクトの「キャッチフレーズ」等の検討

記紀・万葉集をはじめとする文献には、日本文化の源流につながる様々な記述があり、ゆかりの地は全国各地に存在します。それ故、「記紀・万葉プロジェクト」を端緒にして、奈良県のみならず日本列島の様々な地域の人びとの「自分たちの住む地域の魅力再発見」につながることを目指したいと考えます。

皆が愛着を持ってふるさとのことを語るようになれば、日本はもっと豊かな国になるでしょう。本プロジェクトの推進が、閉塞感漂う我が国を元気にするために本県として貢献できるものとなるよう取り組んでまいりたいと思います。

